

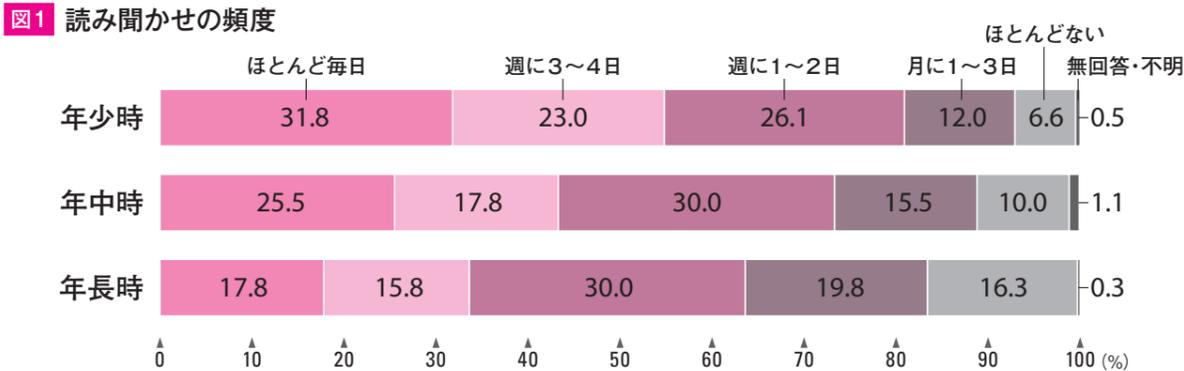
# 3～5歳児家庭の 読み聞かせの現状

ベネッセ教育総合研究所は、全国の約1,000人の保護者を対象に、「子どもの学びの芽生えと母親の関わり、小学校に向けての意識」に関して3年間の縦断調査（追跡調査）を行いました。今回は、この調査の中から、読み聞かせに関するデータを中心に紹介します。園から家庭への情報提供の材料のひとつとして、ぜひご活用ください。

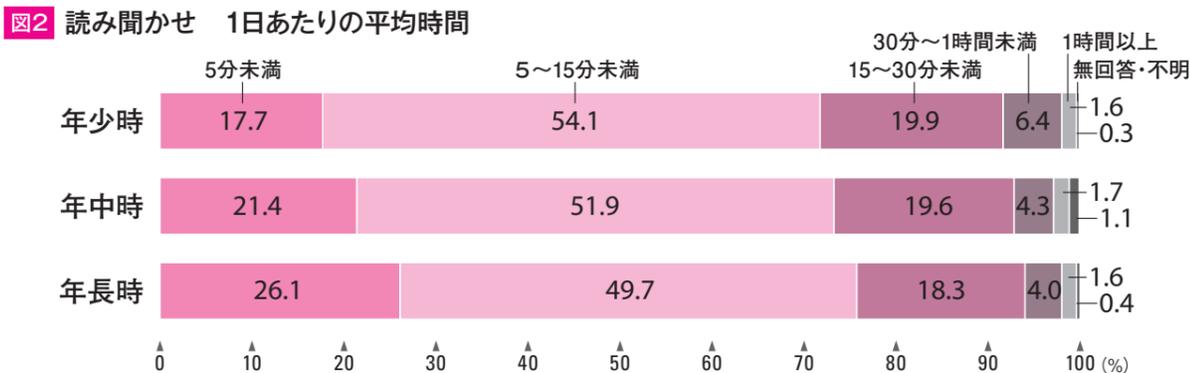
**引用・転載時のお願い** 本調査の結果を引用される際には、調査名称を記載してください（例：ベネッセ教育総合研究所「幼児期から小学1年生の家庭教育調査・縦断調査（3歳児～5歳児）」（2014））。

## 成長するにつれ、 読み聞かせ頻度も時間も減っていく

**Q** あなたは日頃、どれくらいの頻度でお子さまに絵本や本の読み聞かせをしていますか。（あてはまる番号1つに○）



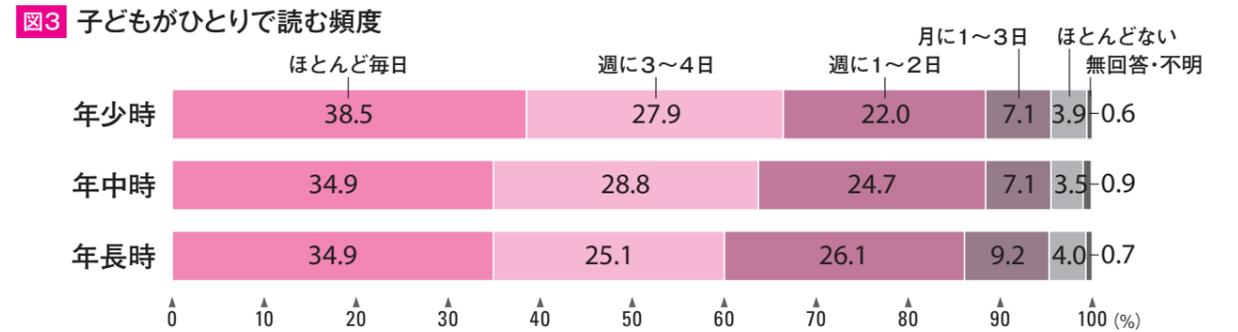
**Q** あなたは先週1週間の中で、1日平均、どれくらい読み聞かせをしていましたか。（あてはまる番号1つに○）



※読み聞かせをしている人のみ。

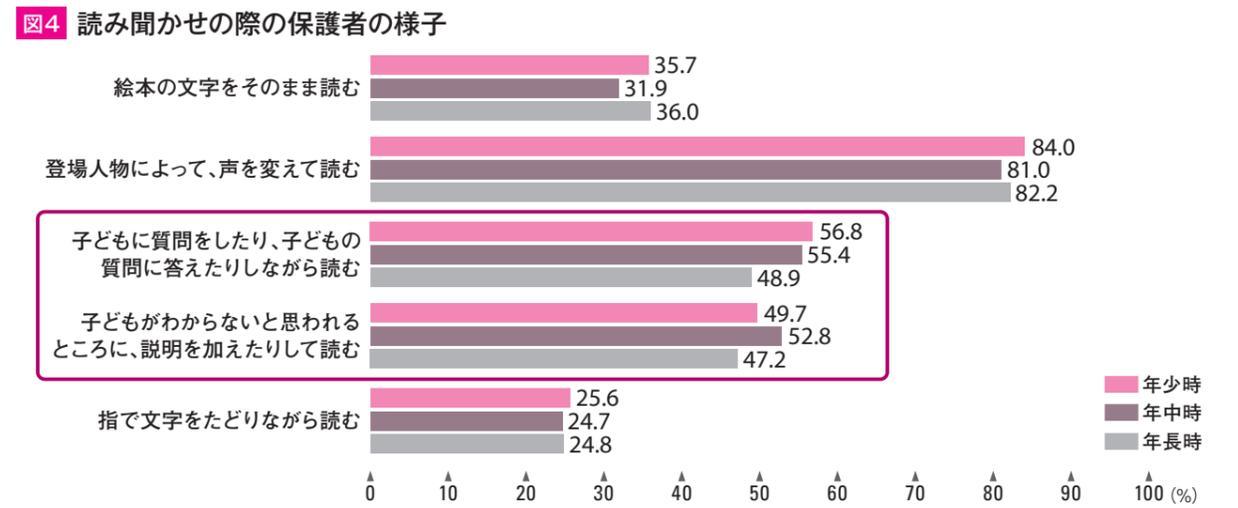
## 約3～4割の子どもがほとんど毎日、 ひとりで絵本や本を読んでいる

**Q** お子さまがひとりで絵本や本を読む（見る）ことはどれくらいありますか。



## 質問に答えたり、説明を加えるなど、子どもの様子に 応じながら読み聞かせをしている人は約半数

**Q** 読み聞かせのときのあなたの様子を教えてください。（あてはまる番号すべてに○）



※読み聞かせをしている人のみ。

出典：「幼児期から小学1年生の家庭教育調査・縦断調査（3歳児～5歳児）」（2014）  
 調査時期：2012年1・2月～2014年1月 調査地域：全国  
 調査方法：郵送法（自記式アンケートを郵送により配布・回収）  
 調査対象：年少時から小学1年生までの継続調査に同意した母親  
 有効回答数：1,077人  
 調査項目：子どもの生活時間／子どもの学びのレディネス／母親の関わり／母親の教育観／園・小学校の満足度など

**研究員解説** 図1は絵本や本の読み聞かせ頻度について聞いたものです。「ほとんど毎日」している割合は、年少31.8%、年中25.5%、年長17.8%でした。子どもの年齢が上がるにつれて読み聞かせの頻度は少なくなっていきます。図2は、読み聞かせをしている人に対して、1日あたりの平均時間を聞いています。「5分未満」は年少17.7%、年中21.4%、年長26.1%と増加しており、1日あたりの読み聞かせの時間も、年齢が

上がるにつれて短くなっていく様子が見られました。図3は、子どもがひとりで読む頻度について聞いたものです。年齢に関わらず、約3～4割の子どもがほとんど毎日ひとりで絵本などを読んでいます。図4は、読み聞かせのときのおうちのかたの様子について聞いたものです。おうちのかたの読み方は、子どもの年齢が変わっても大きな差は見られませんでした。



高岡純子◎ベネッセ教育総合研究所次世代育成研究室室長。妊娠・出産や子育てなど就学前の家庭を対象とする調査研究に携わる。

## 幼児期ならではの読み聞かせの楽しさを 園だよりなどで保護者に発信を



年齢が上がるにつれて読み聞かせの頻度や平均時間が減る中、家庭での読み聞かせを活発にするために、園ができる支援はどのようなものが考えられるでしょうか。東京大学大学院教育学研究科教授の秋田喜代美先生にうかがいました。

東京大学大学院教育学研究科教授

### 秋田 喜代美

あきた・きよみ

日本保育学会会長。専門は保育学、発達心理学、教育心理学、教師心理学。著書に、『保育の温もり』『保育のおもむき』（いずれもひかりのくに）など。

### 文字が読める年長児にも 年齢相応の読み聞かせを

読み聞かせの頻度や1日あたりの平均時間が減る理由として、幼児期になると園で絵本の読み聞かせをしてもらう機会が増えるため、乳児期のように家庭で読み聞かせの時間を設けなくてもよいと考える保護者が増えてきている可能性が考えられます。

年齢が上がるにつれて子どもが文字を読めるようになると、もう読み聞かせはしなくてもいいと思う保護者がいらっしゃるのかもしれませんが。ただ、文字が読めるようになっても継続して読み聞かせをすることは、非常に大切です。読み聞かせは、読んでいる人や聞いている仲間と絵本の世界を共有することができ、絵本を読んでもらうプロセスに楽しさを感じられるからです。

特に幼児になると、絵本の世界をさらに深く楽しめるようになります。場面の間のつながりが理解できるようになるので、次の展開を予想してワクワクします。同じ本を繰り返し読んでもらうことで、好きなフレーズを見つけたり、絵を丁寧に見て新しい発見をしたりする楽しさも知ることができるでしょう。また、5歳児になるとシリーズものも好むようになります。ひとつの作品を通じて得られた情報をもとに、「次はきっとこんな展開になるんじゃないか」と推測して楽しめるようになるからです。この時期にふさわしい読み聞かせがあるということを、保護者にも伝えてほしいと思います。

幼児期だから、絵本を通して文字を学ばせよう、内容を理解させようとする必要はありません。文字を読める、語い力がつくというのは副次

的な効果でしかないからです。年長になると子どもからの質問が減りますが（図省略）、それは自分で予測したり、お話の世界の余韻を楽しめるようになってきたからです。保護者からの質問も減少傾向にあります（図4）、子どもが何か発見したときに一緒に喜び、「もっと続きを聞かせて」といった子どもの声を引き出すような応答性が、保育者にも保護者にも求められています。

### 読み聞かせシーンを撮影し 楽しそうな様子を紹介

読み聞かせの重要性を保護者に伝えるために、今回のようなデータを保護者にそのまま紹介するのもひとつの方法ですが、子どもが読み聞かせを楽しんでいる場面を視覚的に伝えることも効果的だと思います。

例えば、園での読み聞かせのシーンを写真に撮って、掲示してみてもいかがでしょうか。子どもの真剣な表情や楽しそうな様子が伝われば、家庭でも継続して本を読むきっかけになると思います。また、子どもに人気の本を園だよりで紹介したり、保育室に展示したりするのもよいでしょう。保護者に園で読み聞かせをしてもらう機会を設け、子どもたちの表情を感じてもらうのもよいかもしれません。保育者が当たり前だと思って実践されていることを、ぜひ保護者とも共有し、読み聞かせの輪を広げていただきたいですね。

